

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370172

研究課題名(和文)現代パフォーマンス・アートにおける苦痛と共同性

研究課題名(英文)Pain and Community in Contemporary Performance Art

研究代表者

外岡 尚美(TONOOKA, Naomi)

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：10227605

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、現代のパフォーマンス・アートと演劇における身体と苦痛の表象に焦点を合わせ、メディアとしての身体と苦痛および共同性の関係について考察した。マリナ・アブラモヴィッチ、ロン・エイシー、ステラークなど重要なアーティストによる作品を中心に、身体的苦痛が喚起する情動と、観客の関与のあり方、意味生産および解釈の準拠枠を越える情動の作用を検討し、排他的な共同性の構成を刷新する情動の可能性を明らかにした。また技術と接続した身体と観客の体験に着目して、身体的知覚の変容について検討した。本研究は演劇・パフォーマンス研究において自明とされる、「現前」の枠で捉えられた身体のメディア性を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： This project examined the representation of pain and the body in contemporary performance art and theatre, in order to explore how the body is used in performance to create/re-create a microcosm of community, and how performance art and theatre in general work to transform human perception. Focusing on such important artists as Marina Abramovic, Ron Athey, and Stelarc, this study analyzed theatrical presentations of bodily pain and audience involvement, with a particular view toward affective forces that shift and deconstruct frames of communal understandings among audiences. In particular the examination of theatre pieces and technologically enhanced bodies in performance revealed the haptic change in human perception. The study demonstrated the mediatization of the body itself, against the assumption in previous theatre studies that the body stands in opposition to media.

研究分野：演劇学、アメリカ演劇

キーワード：パフォーマンス・アート 演劇 苦痛 情動 共同性 Marina Abramovic Ron Athey Stelarc

1. 研究開始当初の背景

パフォーマンス研究の分野において、身体の研究は 1990 年代以降に大きな進展を見せていた。なかでも 21 世紀における人間や共同体のあり方を考えるうえで重要な視点のひとつは記憶とメディアである。

パフォーマンス研究においては、身体を、公的「記憶の場」に抵抗する対抗的民衆の記憶が集積した場ととらえる、すぐれた研究がなされてきた (、)。これらの研究は、身体が共同体の対抗的記憶を刻み込み行為する媒体 = メディアであることを示唆する。しかし身体はどのように他者とのつながりを媒介することができるのか。記憶とパフォーマンスの研究は、身体行為の主体が観客や他の行為者と取り結ぶ関係や、観客の受容のレベルにおいて、共同性を暗黙の前提とし、身体をメディアとした共同性の構成自体については問いかけていなかった。

またメディアについては、ライブの身体とメディアとの対立概念のなかでパフォーマンスのメディア化が研究されてきた。ライブ・パフォーマンスはメディア化のなかで消失するという指摘がある () 一方で、メディア化のなかでこそ、ライブの身体に「アウラ」が生ずるという指摘もある ()。ライブ性に対するあらゆる事象のメディア性という二項対立的論争があり、それ以降の展開においても、身体自体がメディアによって拡張され、知覚が変容しつつある現状に、舞台芸術のなかの身体はどのように応えているかという問いは、数少ない問題提起 () をのぞいて、体系的な問いとして投げかけられてはいなかった。

2. 研究の目的

本研究では、身体をメディアとした共同性の構成を明らかにするとともに、舞台芸術のなかの身体が、現代のメディア化した身体の様相と知覚の変容の様態にどのように応答し

ているかを明らかにすることを目的とした。

本研究が苦痛のパフォーマンスに焦点を合わせるのは、視覚的・聴覚的に捉えられた苦痛を、観客が自らの苦痛につなげていくような共感覚とも言える触覚性の突出した形態をそこに見ることができるからである。苦痛のこのような側面は、観客のなかにほぼ自動的に共感の共同体を構成するかのような前提をしばしば作り出す (、)。しかし本研究は、この前提自体を疑い、身体と苦痛をメディアとして共同性がどのように構成されるのかを、具体的なパフォーマンス・アートと演劇を対象として検証することを目的とした。また同時に、身体とメディアを接合したパフォーマンス・アートによって、現代における身体の様相と知覚の変容に対する舞台芸術からの応答を明らかにしようとした。

3. 研究の方法

本研究は、以下の方法で進めた。

(1) 自傷的パフォーマンス (ロン・エイシー、マリーナ・アブラモヴィッチ、ボブ・フラナガン)、身体とメディアを接合させるパフォーマンス (ステラーク)、およびイラク戦争を描く演劇について、映像資料や批評・上演記録の閲覧・収集を行った。パフォーマンスに関しては、暫定的に儀式、メディアと主体、現前 (presence) というカテゴリーに分類して検討を行った。この作業にはイギリス、アメリカにおけるアーカイブ調査も含まれる。

(2) 身体、苦痛、メディア、主体、現前を課題とし、演劇学・パフォーマンス研究を中心に、美術史や哲学を含む諸分野における先行の理論的研究を調査し、批判的読解を行った。

4. 研究成果

(1) 情動と共同性についての考察 研究過

程で重要性が浮かび上がってきたのは情動と共同性との関係である。パフォーマンスにおける共同性については、エリカ・フィッシャー＝リヒテの『パフォーマンスの美学』が最も精緻な議論を行っている。マリーナ・アブラモヴィッチ (Marina Abramovic 1946-) を例に挙げて、フィッシャー＝リヒテは、儀式的パフォーマンスでは、「同じ空間で同じ時間に共同主体が居合わせた いま、この状況」において、知覚するものとされるもの、主体と客体、記号と意味の関係が揺らぐ、オートポイエーシス的なフィードバック循環が成立すると論じている。このような伝統的対立構造が崩壊した「境界領域」において美的な変容体験が成立するのであり、そこで自傷的行為は、解釈的・記号的な枠を越えて、共同主体に身体的作用を及ぼすというのである。しかしこのような議論は、理想型として理念化された共同主体と、その共同主体が成立する空間自体が共同性の場としてあらかじめ前提されているからこそ成立している。ここで意味生産の次元は、フィードバック循環のなかで複数の解釈が成り立ち得るといふ論拠から棚上げにされ、解釈的・記号的な枠を越えた身体作用は、そもそも共同主体の共感や同一化に根拠を置いているため、その共同性の枠を出ることはない。理念的共同主体と共同性を暗黙の前提とした議論であり、それによって成立する完結したフィードバック循環＝共同性においては、身体的作用もその完結したシステムのなかで閉じられる。ここに共同性の生成変化を見る可能性はない。

それでは苦痛は現状の共同性を追認する共感の共同体を産み出すだけなのか。苦痛が解釈的・記号的な枠以前の身体的作用＝情動を惹起すること自体に着目し、その情動のあり方と作用に着目して研究を進めた。アブラモヴィッチは「トーマスの唇」(“Thomas Lips”, 1975)の自傷行為で観客の同情的関

与を引き出したが、「リズム0」(“Rhythm 0”, 1974)では完全に無防備な身体に何をしてもいいという許可を観客に与えることによって、むしろ非常に暴力的な関与が行われた。苦痛が引き起こす情動は単なる共感だけではない。ロン・エイシー(Ron Athey 1961-)のパフォーマンスは、1990年代のAIDS危機とゲイのサブカルチャーに直接言及し、死者を悼む儀式性とキリスト教的イメージを含むため、より解釈的・記号的意味生産の次元が見えやすく、情動と意味生産および情動と共同性の相互関係がわかりやすい。

エイシーのパフォーマンスは、苦しむ身体が芸術・サブカルチャー・宗教にわたる、対抗文化的でもあり主流文化的でもある複合的な文化的意味に結びつくことを示している。自傷的パフォーマンスは、対抗的意味を提示するとしばしば仮定されるが、エイシーのパフォーマンスは容易に主流文化的解釈に転換するものである。文化的意味は、完結した記号システムの内部で生産されているのであり、そこに対抗的意味を見出そうと主流文化的意味を見出そうと、同一のシステム内のループで反復生産されているにすぎない。しかしそれと同時に、エイシーの「拷問三部作」(Torture Trilogy, 1952-1995)の第二作、『厳しい人生の四場面』(Four Scenes in a Harsh Life, 1993-96)が喚起したNEA(The National Endowment for the Arts, 全国芸術基金)の助成をめぐるメディアと連邦議会での激しい論争を通して、苦しむ身体と血という物質が、文化的意味を一時的に無効にし、私と共同性の境界画定をする、嫌悪という情動をも産出し得ることがわかる。この情動は文化的解釈と意味に連動しつつ、主流文化的意味を強化するが、それと同時に、身体と文化的意味の結びつきを一時的に遮断し、そのような結びつきがまさに文化的に構成されたものであることを照らし出すという可能性をばらんでいる。結論として、フィッシャー＝リ

ヒテの議論が前提とするような記号システム内部での意味の反復生産を破綻させ、共同性の刷新を可能にするのは単なる共感ではなく、嫌悪も含む情動であること、そしてその情動を作動させるところに、エイシーの身体が新たな共同性を構成するメディアとなり得る可能性があることを明らかにした(論文、学会発表)。

(2)他者の苦痛と情動の可能性についての考察 このような苦痛の物質性とそれが作動させる情動の可能性が、他者の苦痛の表象とその枠組みとなる共同性をどのように刷新させるか。我々と彼らというイデオロギー的共同性が当初から前提とされている場合、他者の苦痛の表象はそのような共同性を強化するのか刷新するのか。自傷的パフォーマンスの対極に立つと思われる、他者の苦痛の表象について、2003年から2013年までにアメリカで上演されたおよそ50作のイラク戦争関連の演劇を対象に検討した。戦地におけるイラクの人々の苦しみや痛みを直接描いた劇は少なく、多くは帰還兵を描くリアリズム演劇であり、社会復帰や家族との再統合の難しさ、戦争体験のトラウマ、そして戦場での暴力をアメリカ国内での暴力的文化・社会・家庭の環境に根ざすものとして描く。またインタビューや調査をもとにしたドキュメンタリー演劇は、現実構成のあり方を検証し、現実やイラクを見る別の見方や、イラクの人々の苦痛を提示しようとする。ジャンルは異なるが、これらの作品でイラクやその人々は言及の対象にすぎず、その他者の実在は奇妙にも認識の枠をすり抜ける。そのような認識のあり方を批判的にとらえる作品もまた、批判が自己の話に回収され、イラクという認識対象の他者化についての批判にはならない。他者の苦痛の表象は傍観者の態度や一時的な同情と共感を喚起するが、認識枠の内部にイラクやその人々が存在す

るにもかかわらず、それを見えなくして外側へと排除するような、認識を枠付けるフレーミングの暴力が一貫して見られる。このように他者の苦痛の表象自体には、イデオロギー的共同性を刷新する可能性はない。共同性を刷新すると考えられる情動はむしろ細部にある物質的な他者の痕跡によって喚起される。表象にとらえきれない物理的な死と苦痛の痕跡を実在化するような数少ない演劇的事例(客体が語りかけてくる次元、主体を凝視する客体のまなざしが前景化される次元、舞台上での血にまみれた遺体の姿など)を通して、痕跡としての唯物的痛みが既存の認識枠をずらし異なる境界画定の可能性を開くことを論じた(図書)。

(3)身体と知覚についての考察 一方で苦痛が喚起する情動とは別な次元で、身体的知覚が作用する形式が「没入」(immersion)である。ステラーク(Stelarc 1946-)の80年代からの「ボディ・サスペンション」(“Body Suspensions”)シリーズなど、身体的知覚を問題にするパフォーマンスと舞台芸術を検討した。フックで吊り下げられるという苦痛によって思考停止しエージェンシーを失うという身体的状況を作り出す「ボディ・サスペンション」は、S/Mや宗教的解釈を産出したが、むしろ身体と精神の乖離を停止し、身体的知覚のみを研ぎ澄ます身体=思考実験だった。また義肢やネットに身体を接続するステラークのパフォーマンスは、技術によって身体的知覚が拡張されている現在の人間のあり方を顕在化し、それについての思考を促す。しかしこのような触覚的とも言える身体的知覚を動員した近年急増する舞台芸術一般は、むしろその世界への観客の没入体験を促している。ネット空間に拡散する身体に対して、リアルな身体感覚の強度が求められているとも言える(論文)が、没入が自閉した共同性を生むだけなのか、それとも数少

ない舞台に見出される知覚情報の配置のあり方のなかに、認識の変容と共同性を刷新する可能性があるのかは今後の課題となる。

以上(1)情動と共同性(2)他者の苦痛と情動についての考察を通して、苦痛や唯物的痛みの痕跡によって喚起される情動が、自己完結的な解釈枠を時に遮断して認識枠をずらすことによって、閉じられた共同性を他者へと開き刷新していく可能性があることを明らかにした。それによって演劇学・パフォーマンス研究の分野で自明とされてきた苦痛による共同体および対抗的価値の生成という図式にある問題点を明確にし、ライブの身体に対するメディアという対立概念による思考が無効であることも明らかにした。(3)身体と知覚についての考察によって、身体とメディアが接続し、過剰な視覚・聴覚情報にさらされた現在の知覚の変容に対して舞台芸術がどう応答しているのか、その一部を示すことができた。一方で触覚的知覚への変容とも考えられるその変容が、体験への没入を産み出すところに、新たな課題を見出した。研究開始時はパフォーマンス・アートのみを対象としていたが、共同性を開き刷新するという倫理的視点が明確になるにつれて、演劇に対象を広げたが、それによって他者性と意味生産の次元をより精緻に分析することができたと同時に、知覚の変容について今後検討すべき課題を発見することができた。

引用文献

Joseph Roach, *Cities of the Dead*, Columbia UP, 1996.

Diana Taylor, *The Archive and the Repertoire*, Duke UP, 2003.

Philip Auslander, *Liveness: Performance in a Mediatized Culture*, 2nd ed., Routledge, 2008.

エリカ・フィッシャー＝リヒテ『パフォーマンスの美学』、中島裕昭他訳、論創社、2009年。

内野 儀「グローバリゼーションは身体に悪い」、あるいはトランスナショナルな埒外で共振するポストヒューマンな身体について」『劇場文化』第12号、静岡県舞台芸術センター、pp.82-92.

Marla Carlson, *Performing Bodies in Pain*, Palgrave, 2010.

Sally O'Reilly, *The Body in Contemporary Art*, Thames & Hudson, 2009.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

外岡 尚美「体験への希求—体験型演劇とサード・レイル・プロジェクト」『国際演劇年鑑 2017』、査読無、国際演劇協会日本センター ITI/UNESCO、2017、pp.53-60

外岡 尚美「苦痛と嫌悪について—Ron Athey と情動のパフォーマンス」青山学院大学文学部『紀要』、査読有、第56号、2015、pp.55-76

〔学会発表〕(計 1 件)

外岡 尚美「グロテスクなアート—Ron Athey と苦痛のパフォーマンス」日本アメリカ文学会東京支部例会、慶応大学(東京都・港区)、2014年1月25日。

〔図書〕(計 1 件)

外岡 尚美「痛みの唯物性について—イラク戦争とアメリカ演劇の倫理を問う」伊達直之・堀真理子・佐藤亨・外岡尚美、『戦争・詩的想像力・倫理』水声社、2016、pp.223-291

〔産業財産権〕

出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

外岡 尚美 (TONOOKA, Naomi)
青山学院大学・文学部英米文学科・教授
研究者番号：10227605

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()